

RPD モデル概念の再整理による ナラティブ教材設計を検討するための理論的整理 —判断の形成を促す文脈に着目して—

A Theoretical Reorganization of Concepts in the Recognition-Primed Decision Model
for Examining Narrative Instructional Materials:
Focusing on Contexts that Promote Judgment Formation

濱田 勇^{*1, *2} 合田 美子^{*2}
Yu HAMADA^{*1, *2} Yoshiko GODA^{*2}

職業能力開発総合大学校^{*1} 熊本大学^{*2}
The Polytechnic University of Japan^{*1}
Kumamoto University^{*2}

〈あらまし〉 コンピテンシー基盤型教育 (CBE) では、状況に応じた判断を伴う能力の発揮が重視されるが、職業訓練において、判断を伴う学習が生じる文脈をナラティブ教材としてどのように検討すべきかについて、十分整理されていない。本研究は、自然主義的意思決定研究における Recognition-Primed Decision (RPD) モデルに注目し、判断の記述・説明理論として示されてきた RPD の概念を、ナラティブ教材設計を検討する観点から理論的に整理し、判断を伴う学習を扱う際の検討視点として提示することを目的とする。

〈キーワード〉 コンピテンシー基盤型教育、ナラティブ教材、Recognition-Primed Decision (RPD)、判断、文脈

1. はじめに

コンピテンシーは、手順の遂行ではなく、状況に応じた判断を伴う能力の発揮として定義されている (REIGELUTH et al. 2017)。しかし、職業訓練では職業における作業を手順で分解し、技能の単位で教材化することが中心となってきた。このため、能力が発揮される仕事の文脈を踏まえた訓練は指導員の暗黙知に依存し、十分に教材化されていない。

こうした課題に対し、濱田ら (2025) は学習者が職場の先輩から「やっpegおらん」と作業を指示され、能力を発揮するためにどのように判断すべきかが問われる状況を文脈として構成し、ナラティブ教材として表現することで、コンピテンシー基盤型教育 (以下 CBE) を職業訓練に実装する教材を提案した。

上記のように CBE の職業訓練においては、判断を伴う能力発揮の場面をナラティブ教材として構成する可能性が示されているが、学習者が自ら「どのように判断すべきか」を考えざるを得ない状況が、どのような文脈として成立しているのかを理論的に整理した研究は少ない。

一方、熟練者の判断過程は、自然主義的意思決定研究において、事前に与えられた選択

肢を比較するのではなく、状況理解と行為の方向性が連関して形成されるものとして説明されている。

KLEIN (2017) が示した Recognition-Primed Decision (以下 RPD) モデルは、その判断過程を記述・説明する理論として位置づけられている。ただし、RPD モデルは教材設計に対する処方直接与えるものではない。

そこで本研究では、RPD モデルを教材内容として適用するのではなく、ナラティブ教材設計を検討する観点から、判断形成に関わる概念を理論的に整理することを目的とする。本稿では設計条件の提示までは行わず、今後設計条件を検討するための理論的基盤を示すことに主眼を置く。

2. 理論整理の観点

本研究における理論整理の観点として、教育工学におけるデザイン研究の立場を参照する。

デザイン研究では、理論の説明にとどまらず、設計判断を支える設計原理や設計条件の提示を目指す研究が重視されている (VAN DEN AKKER 2006; MCKENNEY and REEVES 2012)。これらは、理論をそのまま処方として教材に適用するのではなく、設計判断を支える原理

表 1 KLEIN (2017) に基づき、ナラティブ教材設計の検討に際して参照しうる
理論的整理としてまとめた RPD モデル概念の定義

項目	KLEIN (2017) に基づく定義
関連する手がかり	状況の中で典型性の判断のために必要な、意味のある兆候や手がかりのこと。状況を経験と照合して典型的状況として把握する際に参照される。
典型性	過去の経験に基づく既知のプロトタイプの一例として把握できている状態。典型的状況であると認識されると、次に起こる出来事についての見通し（期待）が形成され、その状況において妥当性の高い行動の方向性が同時に認識される。
期待	典型的状況として把握されたときに形成される「この先どう進むはずであるか」という見通し。熟達者は、期待を通じて出来事が一致・不一致かを通じて状況理解を点検する。期待が裏切られたとき、状況の再評価（診断）に移行する契機とする。
妥当な目標	判断における優先順位に関与し、結果として妥当な行為の方向性を定めるもの。
非典型性に入る条件	提示された状況が、過去の経験に基づく典型的なパターンとして明確に把握できない場合、または、形成された期待と現実の出来事との間に不一致が生じた場合。

やガイドラインとして再構成する立場である。本稿ではこの立場を参照し、RPD モデル概念の理論的整理を行う。

RPD モデルには複数の概念が含まれるが、本研究ではナラティブ教材設計において、学習者の判断形成を検討する上で重要と考えられる「妥当な目標」「関連する手がかり」「期待」「典型性」および「非典型性への移行条件」の5項目に着目し、理論的整理を行った。

3. RPD モデル概念の再整理

RPD モデルに示された各概念について、KLEIN (2017) における記述内容をもとに、ナラティブ教材設計を検討する際に参照しうる理論的観点として整理した(表1)。具体的には、5項目を手がかりとして KLEIN (2017) の本文中における定義・説明・機能に関する記述を抽出し、記述内容の範囲を逸脱しないよう留意しつつ、一文で意味が把握できる形に要約して定義した。

4. 考察

本研究の成果は、判断の記述・説明理論である RPD モデルを理論のまま教材として適用するのではなく、ナラティブ教材設計を検討するための理論的整理を行った点にある。

これは、理論を設計の検討に際して参照しうる形で整理するという、本研究で参照したデザイン研究の立場に基づくものである。

具体的には、RPD モデルにおける各概念の記述内容を整理し、ナラティブ教材設計を検討する際に、設計者が参照する視点として位

置づける文脈に関する理論的整理を行った。

5. まとめ

本研究では、CBE を職業訓練に実装するための基盤として、ナラティブ教材設計において学習者が判断せざるを得ない状況が生じる文脈に着目した。本稿で整理した理論的視点を基盤的整理として、今後、ナラティブ教材設計における設計条件の検討を進める。

参考文献

- KLEIN, G. (2017) *Sources of Power: How People Make Decisions* (20th Anniversary ed.). MIT Press.
- MCKENNEY, S. and REEVES, T. C. (2012) *Conducting Educational Design Research*. Routledge.
- REIGELUTH, C. M., BEATTY, B. J., and MYERS, R. D. (Eds.) (2017) *Instructional-design theories and models, Vol. IV: The learner-centered paradigm of education*. Routledge.
- VAN DEN AKKER, J., GRAVEMEIJER, K., MCKENNEY, S., and NIEVEEN, N. (Eds.) (2006) *Educational Design Research*. Routledge.
- 濱田勇, 喜多敏博, 久保田真一郎, 合田美子 (2025) 職業訓練校におけるコンピテンシー基盤型教育の普及を目指して: 訓練用教材の開発と汎用プロセスの提案. 熊本大学大学院 社会文化科学教育部 教授システム学専攻, 修士論文